

近世・近代の女性の旅について

―― 納経帳と絵馬を中心に ―

山本光正

Travel by Women in Early Modern and Modern Japan

はじめに

- ① 納経帳にみる女性の旅
- ② 絵馬にみる善光寺参詣
おわりに

〔論文要旨〕

近世の旅に関する研究は大きく分けて、旅における行動・見聞及び交通の実態を明らかにしようとするものと、社寺参詣そのものに重点を置き民衆の信仰を明らかにしようとするものがある。

これらの研究はいずれも史料の関係から男性を中心としたものであったが、女性史研究の活発化に伴い、女性の旅についても研究成果が発表されるようになった。旅の研究は旅日記を主な素材として行われるが、女性の場合旅日記を書くことができるのは相当の教養を身につけた階層であるため、庶民女性の旅の実態をみることは困難である。

女性の旅全般について把握するには、旅日記以外の史料の発掘が課題といっていよう。既に宿坊の台帳類や、供養塔等の石造物を利用した研究も行われているが、本稿では納経帳と絵馬によって女性の旅の一端を述べてみた。納経帳は千葉県市原市

の万光院に同市勝間の茂手木氏が奉納したもので、同家の先祖「とら」が寛政七、八年にかけて、西国・坂東・秩父の観音霊場及び四国八十八ヶ所を巡ったものである。納経帳は「とら」の足跡を追うことしかできないが、女性が一人でこれだけの旅をしたことは注目される。絵馬は信州の善光寺に参詣した女性達が千葉県岬町の清水寺に奉納したもので、明治から大正まで年代不明も含めて二六点が確認されている。図柄や墨書から旅のコースや参拝の様子・同行者の地域・名前を読みとることができる。絵馬は近代のものだが、近世においても同様の旅が行われていたと考えられる。

納経帳・絵馬共に旅日記に比較すると情報量は少ないが、これらのデータを蓄積することにより、近世における女性の旅の実態を明らかにしていくことができるであろう。

はじめに

近世交通史の研究は宿駅・助郷・関所を中心として進められてきた。そのためモノや人の動きはこの三点を軸として扱われてきたといっていだらう。人の動きといっても主たる研究対象になってきたのは將軍・公用旅行者・参勤交代による移動であり、これら移動に伴う宿駅や助郷の負担についてである。つまり人の移動を受け容れる側からみてきたわけである。

これに対し移動する側を主軸とした研究は著名人等の旅については行われてきたが、伊勢参宮を代表とする庶民の旅についての研究はほとんど行われてこなかった。こうした中で新城常三は『社寺参詣の社会経済史的研究』⁽¹⁾を著したものの、その内容が多岐に渡りしかも緻密な研究であったこと、さらに研究の流れから新城の業績を継承発展させる研究はなかなか行われなかった。

その後各地に残る旅日記等を中心とした庶民の旅の研究が進み、女性の旅の研究へと発展していった。平成三年度第十七回交通史研究会大会では統一論題を「旅する女性」とし、網野善彦の記念講演「中世における女性の旅をめぐって」をはじめ、胡桃沢勘司・深井甚三・小暮紀久子・柴桂子・太田富康・前田淑らによる研究発表が行われ、これら成果は『交通史研究』二七号に収録されている。前記発表者は女性の旅に関する研究成果を数多く発表しているが、中でも深井甚三は近世の女性の旅を個人の旅としてではなく総括的に捉えようとしており、今後の女性の旅研究に対する一つの方向を提示している。⁽²⁾

女性に限らず旅の研究の中心になる史料は「旅日記」である。男性の場合幅広い階層の人々が旅日記を残しているが、女性の場合旅日記のほとんどが相当の教養を身につけた人の記したものであり、一般庶民の女

性の旅を知ることはいできない。この点について柴桂子も「旅日記を書いている女性の身分は大名家やその家臣の家族のほか町人・神官・住職・学者の家族や上層農民の家族であり、中農階級以下の女性の旅日記が見当たらないのは残念である。」⁽³⁾と指摘しているが、女性の識字率というか、写字率からみれば当然のことであり、「中農階級以下の女性の旅日記」は今後もそれ程多くのものは出てこないであろうから、旅日記に代る史料を発掘することに力を注ぐ必要があるだろう。

代替史料の発掘といっても偶然に頼らざるを得ない部分が大きい。本稿で取り上げる納経帳と絵馬も意識して見つけたものではないし、旅日記に比較すればその情報量は極めて少ないものの、女性の旅の研究を進めるにはこうした史料の蓄積が必要であろう。

① 納経帳にみる女性の旅

(一) 納経帳の概要

ここで取り上げる納経帳全六冊は千葉県市原市の万光院に奉納されたものである。住職の近藤隆秀氏によると納経帳は市原市勝間の茂手木一夫氏が菩提寺である万光院に奉納したもので、旅日記も残されていたというのだが、現在行方不明とのことである。納経帳を残したのは茂手木家の先祖である「とら女」で、彼女は身体的理由から霊場巡りをしたと伝えられており、物見遊山的な社寺参詣ではなかった。

納経帳は全六冊からなり、その概要は次の通りである。

一冊目

寛政五年二月二五日～同年四月三〇日。金龍山浅草寺に始まり西国二
四番中山寺迄。

二冊目

寛政五年七月二五日～同年八月二五日。富士山北口浅間宮に始まり筑

波山大御堂迄。

三冊目

寛政七年三月二三日～同年六月二日。金龍山浅草寺に始まり西国二五番清水寺迄。

四冊目

寛政七年六月三日～同年七月二五または二六日。西国二六番一乗寺に始まり四国五六番太山寺迄。

五冊目

寛政七年七月二六日～寛政八年三月七日。四国五七番に始まり坂東一六番水沢寺迄。

六冊目

寛政八年三月二二日～同年四月十日。秩父三四番水潜寺に始まり坂東三三番那古寺迄。

納経帳は乱丁または丁数を間違えて記載押印してもらったためか、日程の前後している部分があるため、筆者が適宜修正したことを断っておく。例えば三冊目の最後は寛政七年六月二日西国札所二五番清水寺だが、四冊目の冒頭に同年五月二四日御室御所がある。

さて右の六冊のうち、一冊目と二冊目については「とら」が旅をした時の納経帳かどうか疑わしい。一冊目は主として西国札所を巡った時のもの、二冊目は坂東札所を巡った時のものであり、とらが同一地域を二度巡ったとは考えにくい。さらに三冊目以降は表紙に「勝間とら」とあるのに一冊目は「納経帳」とあるだけで、何処にも「とら」の署名が見当たらない。「とら」が二度同じ巡礼を行ったとは考えにくいとしたが、その可能性は否定できないものの、ここでは確実に「とら」の納経帳と判断できる三冊目以降を取り上げることにする。

(二) 納経帳にみる「とら」の旅程

「とら」の旅は西国札所・四国八十八ヶ所・坂東札所・秩父札所を巡る旅であったが、全行程一人で回ったという確証はない。しかしこれだけの行程を全行程同伴してくれた人がいたとは考えられないだろう。

とらが最初に納経帳に記載をしてもらったのは寛政七年三月二日坂東札所二九番千葉寺においてである。これからみると勝間村を出立したのは三月二〇日か二一日であろう。二三日に亀戸の羅漢寺・亀戸天神を経て江戸に入り浅草寺で記帳をしてもらい、二八日には中山道熊谷宿の熊谷寺、三〇日妙義大権現、四月一四日津島社に参拝しているので、「とら」は中山道を進み、鶴沼宿辺りから名古屋に出て佐屋路を行き津島に達したのだろう。

津島社に参拝したのであるから、津島からは佐屋に出て船に乗り桑名へ入り、伊勢に向ったとみるのが順当である。四月一七日朝熊岳で記帳してもらい、二二日に熊野新宮、そして二四日西国観音霊場第一番青岸渡寺に至り、これより西国札所巡りがはじまる。二六日熊野本宮を参拝しそれより紀伊半島を横断して半島西側を北上し、五月三日紀三井寺(西2)、六日粉河寺(西3)を経て八日に高野山を登っている。翌九日は慈尊院、一〇日光瀧寺・槇尾寺(西4)、一二日に葛井寺(西5)、一四日壺井寺(西6)、そして吉野山で蔵王権現の記帳を受け、一五日岡寺(西7)、一六日長谷寺(西8)、一七日奈良に入って興福寺南円堂(西9)、一八日には宇治の三室戸寺(西10)を参拝している。次は上醍醐寺(西11)だが納経帳に月日の記入がないため、一八日か一九日かは不明である。一九日岩間寺(西12)、二〇日石山寺(西13)、二一日観音正寺(西32)・長命寺(西31)、二二日は三井寺(西14)のみの参拝であるが、この日のうちに京都に入ったとみられる。

五月二三日は京都市中を巡っている。今熊野(西15)・六波羅密寺(西17)・清水寺(西16)、二三日または二四日に頂法寺(西18)、二四日

革堂(西19)・北野天満宮・御室御所を参拝し、二五日は京都を出て穴太寺(西21)、二六日善峰寺(西20)、二七日は移動に費し二八日は摂津の総持寺(西22)・勝尾寺(西23)、二九日は中山寺(西24)と西方へと動き、六月二日は清水寺(西25)、三日一乗寺(西26)、四日円教寺(西27)と参拝して西国札所巡りに一時別れを告げ四国八十八ヶ所巡礼に向かっている。

四国に入って最初に参拝したのは七八番郷照寺で六月一三日のことである。この日は高照院(四79)・国分寺(四80)、一三日または一四日白峰寺(四81)、一四日根香寺(四82)・一宮寺(四83)、一四日または一五日に屋島寺(四84)、一五日は八栗寺(四85)・志度寺(四86)、一六日は長尾寺(四87)、一七日は大窪寺(四88)を巡って讃岐を出ている。

六月一八日に阿波に入り一番から二三番を回るが、日程と寺院名を列記しておく。一八日靈山寺(四1)・極楽寺(四2)・金泉寺(四3)、一九日大日寺(四4)・地藏寺(四5)・安楽寺(四6)、一九日または二〇日十楽寺(四7)、二〇日熊谷寺(四8)・法輪寺(四9)・切幡寺(四10)・藤井寺(四11)、二二日焼山寺(四12)、二二日大日寺(四13)・常楽寺(四14)・国分寺(四15)・観音寺(四16)、二二日または二三日井戸寺(四17)、二三日恩山寺(四18)、二四日立江寺(四19)・鶴林寺(四20)・太龍寺(四21)、二五日平等寺(四22)、薬王寺(四23)。

これより土佐へ向うが、二三番から二四番までは二里程しかも山越・川越の道であり、海辺を飛び石伝いに一里程の所もある。こうした難所を越え二四番最御崎寺に到着したのは六月三〇日である。三〇日から七月二日にかけて津照寺(四25)・金剛頂寺(四26)、二日は神峰寺(四27)、三日大日寺(四28)・国分寺(四29)・安楽寺(四30)、五日竹林寺(四31)・禅師峰寺(四32)、六日雪隠寺(四33)・種間寺(四34)・清瀧寺(四35)、六日または七日に青龍寺(四36)を巡っている。青龍寺から三

七番岩本寺までは一三里であるが、岩本寺到着の日は不明である。岩本寺より足摺岬の金剛福寺(四38)までは二里だがこれも到着日は不明である。金剛福寺より延光寺(四39)までは二里で七月一三日の到着である。

延光寺を出立すれば次は伊予に入る。観自在寺(四40)までは七里だが到着日は不明である。それより一五日に番外の観世音寺を経て一七日に龍光寺(四41)に達し、仏木寺(四42)・明石寺(四43)を巡っている。大宝寺(四44)には二二日の到着だが、この間の距離は二里である。

この日は外に岩屋寺(四45)を参拝し浄瑠璃寺(四46)に向うがこの間は八里であるのに、到着は二三日である。この日八坂寺(四47)・西林寺(四48)・浄土寺(四49)・繁多寺(四50)・石手(四51)を回り、二四日太山寺(四52)・円明寺(四53)、二五日延命寺(四54)・南光坊(四55)、二五日または二六日泰山寺(四56)、二六日栄福寺(四57)・仙遊寺(四58)、二六日または二七日国分寺(四59)、二七日横峰寺(四60)・香園寺(四61)・宝寿寺(四62)・吉祥寺(四63)、二七・二九日の間に前神寺(四64)、二九日三角寺(四65)を拜しさらに奥の院の金光山仙龍寺でも納経帳に記帳を受けている。

八月一日は雲辺寺(四66)だが、当寺は阿波・伊予・讃岐の境にあるものの讃岐の札所とされているという⁴⁾。但し現在は徳島県である。二日は大興寺(四67)・神恵院(四68)・観音寺(四69)・本山寺(四70)、三日は弥谷寺(四71)・曼陀羅寺(四72)・出釈迦寺(四73)・甲山寺(四74)、三日または四日に善通寺(四75)、四日金倉寺(四76)そして道隆寺で記帳をしてもらい四国八十八ヶ所巡礼が完了している。

四国から本州に渡り再び西国三十三ヶ所巡りがはじまる。「とら」は山陽道を経て日本海側に向い、八月一二日西国札所二八番成相寺に到着し、一四日勝尾寺(西29)、一八日宝厳寺(西30)、二〇日に華厳寺(西33)

参拝で西国三十三ヶ所の巡拝を果たしている。

西国札所巡りも終えた「とら」は参拝日は不明だが尾張の勝軍山剣正寺（愛知県一宮市）に参拝している。華嚴寺から中山道を通り加納宿で中山道を離れ一宮に向かったと思われる。それより東海道を進み御油宿から鳳来寺を目指し八月二六日に参拝し、秋葉山に出て東海道に戻っているが、再び東海道を分岐し九月一二日甲府の善光寺に達している。恐らく岩淵辺りから甲府へ向かったのだろう。それより甲州道中を進んで一三日に富士北口浅間宮を参拝している。浅間宮までは石和からの道を歩いたのだろうか、甲府から一一日半で北口まで達することができるものか少々疑問は残る。

浅間宮を参拝した「とら」は相模へ向い、最乗寺と坂東札所五番勝福寺を参拝するがその日は不明である。九月一六日には光明寺（坂7）に参拝して一七日には大山寺・日向薬師、一七日または一八日に長谷寺（坂6）、九月一八日星谷寺（坂8）そして藤沢へ出て一九日に遊行寺・江の島弁財天・長谷寺（坂4）・田代寺（坂3）・岩殿寺（坂2）・杉本寺（坂1）・鎌倉鶴岡八幡宮、二〇日は弘明寺（坂14）を巡っている。これより江戸そして故郷勝間村を目指したようで、途中芝の増上寺に寄っている。

納経帳から足跡を辿っているので勝間村到着の月日を知ることができないが、寛政七年九月の末頃ではないだろうか。

「とら」の旅はまだ続き、翌寛政八年二月中旬頃再び巡拝に出立している。二月一六日波切不動で知られる千葉県成東町の長勝寺を参拝し、坂東・秩父札所巡りがはじまる。成東から北上して一七日に銚子の円福寺（坂27）、一九日鹿島神宮、二〇日香取神宮を経て二一日に滑河の龍正院（坂28）で記帳を受け、滑河からは利根川を渡って常陸に入り、その日のうちに阿波の大杉神社に詣でている。

二月二日には清瀧寺（坂26）、二三日は筑波山の大御堂（坂25）、次は二四番札所薬法寺に向うが途中現真壁町の椎尾山椎尾寺（薬王院）に参拝している。二四日薬法寺（坂24）・西明寺（坂20）、二四日から二八日の間に正福寺（坂23）・佐竹寺（坂22）、二八日は坂東札所最大の難所八溝山の日輪寺（坂21）に達しており、納経帳には「常野奥三州境」と記されている。

日輪寺への道が坂東札所最大の難所というが、「とら」はこれより日光中禅寺湖畔の坂東一八番中禅寺へ向っている。日輪寺から中禅寺迄直線距離にしても一〇〇キロ余あり、厳しい上り坂が待っている。寛政八年の二月は大の月で三〇日迄あるものの、大変な移動である。中禅寺到着は三月一日だが、ここに納経帳を示しておく。

奉納経 吉軸

坂東拾八番

清瀧 観音 大士 前

寛政八 丙 三月朔日 円通寺
辰 行者文

三月二日大谷寺（坂19）、二日から四日の間に満願寺（坂17）、三月四日は「岩船山自然湧出地蔵尊」とあるから、栃木県岩船町の岩船山に所在する岩船山高勝寺に参拝している。三月六日長谷寺（坂15）、三月七日水沢寺（坂16）、から榛名山を参拝して信濃の善光寺に三月一四到着し、それより群馬県富岡市一ノ宮の抜鉾大神（貫前神社）、二二日からは秩父札所巡りがはじまる。

秩父巡礼は三四番から一番迄逆打ちであるから、日程と札所を箇条書きにしておく。

三月

二二日水潜寺

二三日菊水寺・法性寺・観音院

善光寺参詣絵馬一覧

番号	年 月 日	地 名	同 行 人 数		画 面	画 工	備考
			総数	内 訳			
①	明治7年カ	不 明	16人	先達1人(男) 女性15人	善光寺内陣	晴 雪	
②	明治14年6月□日	不 明	13人	全員女性	右日光 左善光寺内陣	不 明	人数は画面による
③	明治14年9月	不 明	14~5人		善光寺外観図	不 明	人数は画面による
④	明治16年5月17日	大 原 町	16人	先達2人(男) 女性14人	善光寺内陣	不 明	
⑤	明治19年	御 宿 町	4人	全員女性	右日光 左善光寺内陣	晴 雪	
⑥	明治25年6月15日	岬 町	25人	先達2人(男) 女性23人	善光寺内陣	晴 雪	
⑦	明治27年5月	不 明	40人前後		右日光カ 左善光寺外観	不 明	
⑧	明治20~30年代	大原町・岬町	17人	女性15人・男性2人	右日光 左善光寺外観	弓 削	
⑨	明治45年2月27日	岬 町	15人	先達1人(男) 女性14人	右上日光 右下横浜 左善光寺内陣	晴 雪	
⑩	明治45年6月22日	大 原 町	34人	先達3人(男) 女性30人・男性1人	右上日光 左善光寺内陣	晴 雪	
⑪	明治45年	岬 町	26人	先達2人(男) 女性24人	右日光 左善光寺内陣	晴 雪	
⑫	明治□年7月	大 原 町	7人	全員女性	善光寺内陣	晴 雪	
⑬	明治□年8月	大 原 町	7人以上		右日光 左善光寺内陣	晴 伯	
⑭	大正2年3月11日	岬 町	23人	先達1人(男) 6人(女) 女性16人	右日光 左善光寺内陣	晴 雪カ	
⑮	大正2年8月9日	大 原 町	16人	先達3人(男) 4人(女) 女性9人	右日光 左善光寺内陣	晴 雪カ	
⑯	大正3年4月16日	大 原 町	14人	女性12人・男性2人	右日光 左善光寺内陣	晴 雪	
⑰	大正6年6月19日	大 原 町	12人	先達3人(男) 1人(女) 女性8人	右上日光 右下横浜 左善光寺内陣	晴 雪	
⑱	大正8年4月	岬 町	10人	先達1人(男) 女性9人	右善光寺外観 左日光	芳 蔵	
⑲	大正9年	岬 町	15人	女性13人・男性2人	右日光 左善光寺内陣	晴 雪カ	
⑳	大正12年5月	大 原 町	12人	全員女性	善光寺内陣	晴 雪	
㉑	不明	不 明	17人	女性13人・男性4人	右日光 左善光寺内陣	晴 雪	人数は画面による
㉒	不明	大 原 町	6人	女性4人・男性2人	右日光 左善光寺内陣	晴 雪カ	
㉓	不明	房 州	8人	全員女性	善光寺内陣		
㉔	不明	不 明	9人前後		善光寺外観	弓 削	人数は画面による
㉕	不明	不 明	不明		善光寺外観	弓 削カ	
㉖	不明	不 明	不明		善光寺外観	弓 削カ	一部欠損

二四日宝雲寺・長泉院・橋立寺・大淵寺・円融寺・久昌寺・法泉寺
二四〇二五日音楽寺・栄福寺・観音寺

二五日岩之上堂・龍石寺・神門寺・定林寺・西光寺・少林寺・今宮坊・

慈眼寺・野坂寺・常楽寺・大慈寺・明智寺・西善寺

二六日法長寺・ト雲寺・長興寺・金昌寺・常泉寺・真福寺・妙音寺

秩父巡礼も果たした「とら」は残っている坂東札所を巡りつつ故郷を指している。三月二七日慈光寺（坂9）・正法寺（坂10）・安楽寺（坂11）、二八日慈恩寺（坂12）、四月五日には上総の笠森寺（坂31）、上総一宮の玉崎神社を参拝している。四月六日に清水寺（坂32）を参拝して安房に向い、四月九日には清澄寺を経て翌一〇日に那古寺三三番札所の参拝を果たしている。清澄寺から那古寺まで僅か一日余で達しているが、清澄から安房に抜ける山道を行ったのだろうか。いずれにせよこれで「とら」の旅は終わったわけである。但し三〇番札所高蔵寺の記帳が行われていない。これだけ歩いているのだから除外したとは考えられない。その部分が脱落したのだろうか。

全六冊目の納経帳の最終丁には次のように記されている。

西国三拾三所

上総国市原郡
かつまむら村
とら殿

本尊 十一 面 観 世 音

卯五月廿三日

行者也

卯年寛政七年五月二三日は「とら」が京都に居た時のことである。いづれかの札所で記してもらったものであろう。

以上の旅を要約しておこう。寛政七年三月二日の千葉寺を皮切りに四月二四日西国札所第一番青岸渡寺、六月一三日四国に入って最初の八十八ヶ所寺院郷照寺、そして八月三〇四日に四国八十八ヶ所巡礼を完了

している。八月二〇日には華嚴寺を参拝して西国三十三ヶ所巡礼も果し、坂東札所等を巡りながら九月下旬に帰村している。

寛政八年二月中旬頃再び霊場巡りに出立。坂東・秩父札所巡りを果たして四月中旬頃帰村。

壮大な旅である。「とら」の旅は特別な旅でありこれを以て普遍的な近世女性の旅を語ることはできないが、近世という時代は女性がこれだけの旅ができる時代であったことは確かである。当然数多くのアクシデントにも遭遇したであろうことは容易に想像できる。「とら」の巡礼旅で疑問を抱くのは旅費の問題である。巡礼の旅に徹すればそれに適した宿泊施設もあったであろうが、すべて無料というわけにはいかないだろうから、相当の金銭を必要としたであろう。

②絵馬にみる善光寺参詣

(一)清水寺の絵馬の概要

女性の旅を代表するものとしてよく知られるのが信州善光寺参詣である。代表するといってもその信仰圏がどこまで広がっていたのかは定かでないが、新城常三は「しかし、善光寺信仰と参詣は地元信濃を中心に中部地方でより盛んであろう。」と述べ、桜井徳太郎も善光寺講は中部日本に広い信者を持つと述べている。⁽⁵⁾

小林計一郎は善光寺の宿院である正信坊の宿帳を分析し次のように述べている。

嘉永元年から明治四年まで二十四年間に、正信坊に宿泊した道者は七四〇一人であるが、そのうち女は三五五三人で全体の四八パーセントに当る。このうち文久元年は男の数が非常に多いが、これは和宮御降嫁の大通行のため、中山道筋にかりだされた人足が、通行のすんだあと、たくさん参詣に來たため、この年を除くと、女の

割合はほぼ正確に五十パーセントになる。

こうした数値は善光寺参詣者に女性が多かった一つの証拠になるようにしている。このように多くの女性が善光寺参詣に来た理由についていくつかの見解を示しているが、「しかしこれらは想像にすぎず、もっと研究を重ねなければ何とも言えない。」と述べている⁽⁶⁾。

理由は不明にしろ現実に女性の善光寺参詣者が多かったわけであるが、本稿においては近代に入ってから善光寺参詣の一端を絵馬を通してみていくことにする。

本稿において取り上げる絵馬は、千葉県夷隅郡岬町鴨根に所在する音羽山千手院清水寺に奉納されたものである。当寺は清水観音の俗称で知られる天台宗の寺院で、本尊は十一面観音、坂東三十三ヶ所の第三十三番札所でもある。

善光寺絵馬について述べる前に、清水寺に奉納されている近世（大正期）に至る絵馬全体の概要について記しておく。本堂には絵馬をはじめとする奉納物が所狭しと掲げられているため、重なっているものや剥離しているものも多く、その全貌を知ることができない。そのため絵馬の概要といっても正確な年代や数値等を示すことができず、極めて抽象的な表現になってしまうことを断っておく。

奉納されている絵馬は大型・中型のもので小絵馬はほとんどなく、その年代は大半がというより数点を除いて明治以降のものようである。明治以降、盛に絵馬が奉納されるようになった最大の理由は絵馬を描く画工の存在にあったとみてよいだろう。

絵馬は三点ほどの地曳網漁絵馬以外は社寺参詣に関するものである。地曳網の絵馬三点はいずれも晴雪なる画工の描いたもので、うち二点は明治一七年・明治二三年に奉納されたものである。

社寺参詣に関するものは善光寺参詣が最も多く二六点上に上っている。次いで伊勢参宮（西国も含む）七点、出羽三山一点であるが、前述のよ

うに悉皆調査をしたわけではないので、実際にはこれを上回る絵馬があるともみてよいだろう。伊勢参宮絵馬のうち四点は歴史上の故事や伝説などに基く武者絵のようで、素人目にも他の絵馬より出来がよいようである。四点とも画工の名を読みとることはできないが、一点は文久元年、その外の三点は幕末から明治にかけてのもので、二・三点は同一画工の手になるものと思われる。残る三点のうち二点は風景、一点は太神楽を舞う図で前者は伊勢神宮と二見ヶ浦の図と安芸の宮島厳島神社を描いたものである。伊勢神宮と二見ヶ浦の図は明治三〇年奉納のもので画工は弓削□醉である。後者は明治四〇年代の奉納で、画工の名は記されていないものの判読できない。出羽三山の絵馬は羽黒山を中心にした風景図だが、三山に関する絵馬はあまり多くはないようである。

社寺参詣祈念の奉納物は次第に絵馬から記念写真に移行していくようだが、清水寺本堂にも額に入った記念写真が奉納されている。本稿においては記念写真にまで言及できないが、これらの分析を通して社寺参詣そして旅行の変化についても見通すことができるであろう。

（二）善光寺参詣絵馬と女性の旅

① 絵馬の墨書を中心に

清水寺に奉納されている善光寺絵馬は明治以降のものではあるが、上総国夷隅郡において行われていた近世以来の女性の善光寺参詣の一端を語ってくれるものである。

奉納された絵馬を一覧にまとめたものが「善光寺参詣絵馬一覧」である。これによると今回確認できた絵馬二六点のうち、明治期のものが一三点、大正期のものが七点、そして年代不明のものが六点であるが、いずれも明治または大正期のものと断定して間違いないであろう。

地名とは絵馬奉納者つまり旅をした人々の住む村のことだが、ここでは便宜的に現行自治体名を表示した。これによると奉納者は夷隅郡の大

原町・岬町に集中しており、外に御宿町と「房州」とのみ記されたものがある。清水寺の所在地からみて岬町・大原町の絵馬がほとんどを占めることは当然のこととはいえ、それぞれの地域には然るべき神社や寺院があるのに、清水寺に奉納されるというのは地域を越えて当寺が多くの人々から信仰されていたことによるものだろう。さらに清水寺が坂東札所であったことも大きく影響しているとみられる。坂東札所は不特定多数の参詣者が訪れる場であり、折角奉納した絵馬を多くの人々に見てもうることができたわけである。

奉納者の地域を近世の村単位にみてみよう。但し字名で記されているものもあり、近世のどの村に属するか判断し難い場合がある。

- ④ 中魚落村 ⑤ 岩和田村（但一名は一の宮村） ⑥ 井沢村・三門村
 ⑧ 鴨根村外一ノ二ヶ村 ⑨ 江場土村 ⑩ 東海村（明治二二年に若山・新田・深堀・日在・釈迦谷村を合併して成立。近世村名不明） ⑪ 長者町（明治三三年に長者町・江場土・三門・井沢・東小高村が合併して成立。但しこの場合旧の長者町であろう。） ⑫ 矢指戸（中魚落村の字） ⑬ 中魚落村 ⑭ 江場土村の外に宮前とあるが不明 ⑮ 中魚落村 ⑯ 岩和田村 岩船 ⑰ 日在村 ⑱ 三門村・井沢村 ⑲ 東中根村外に椎木村一名 ⑳ 中魚落村 ㉑ 中魚落村

村内の字単位、村単位で参詣が行われるのは当然のことだが、隣接する村人同士の参詣もみられる。善光寺参詣のグループは講組織などとも関連するだろうが、当該地域の自治体史には女性の善光寺参詣等については触れていない。⑤と⑬は他地域のものが特別に参加した事例のように、⑤の墨書を次に掲げておこう。

明治十九年

善光寺同行

岩和田村内

六軒町吉田 甚七

これによれば一宮中宿の母□志は志東氏の妻の母、志東氏が養子であった場合は彼の母ということになるだろう。

次に善光寺参詣者の人数についてみてみよう。人数の確実に判定できる絵馬だけを見ると、参詣者の最も少いのが⑤の四人、多いのが⑩の三人で、平均は一五・三人である。

同行人数の内訳をみると、同行者全員が女性というケースが五件ある。明治一〇年代に二件あるが一〇年代では近世とほぼ同じような旅であったから、かなりの困難が伴う旅であったろう。その他のグループには男性が一ノ四名参加しているが、このうち男性が先達として入っているのは①④⑥⑨⑩⑪⑬⑮⑰⑱であるが、⑭は先達として男性一人の外に女性六人、⑯は先達男性三人、女性四人、⑰は先達男性三人、女性一人が入っている。⑮などは半数近くが先達である。その他の絵馬には「先達」の肩書は記載されていない。善光寺同行中において先達は名譽な地位であろうから、必ず絵馬には書き入れたであろう。

絵馬の⑰と⑱の二点は同行者の年齢が記載されているのでそれぞれの墨書を掲げておこう。

⑰の墨書

善光寺日光横浜

同行夷隅郡東海村

日在

母	こ	□
新町□保	□	□
母	□	□
□志東	□	蔵
母	きん	
一宮中宿□		
母	□	志

⑮の墨書

画工

大	正	六	年	六	月	拾	九	日				
先達			長者町三門		日在							
齋	小	木	小	中	小	吉	露	齋	水			
藤	守	嶋	守	村	高	田	崎	藤	野			
要	浦	松	た	せ	わ	ひ	せ	す	い			
蔵	蔵	治郎	つ	ん	か	さ	き	ゑ	と			
当六十一歳	当五十一歳	当五十一歳	当五十七歳	当五十一歳	当□□歳	当四十八歳	当四十七歳	当四十五歳	当四十五歳	当四十五歳		

夷隅郡長者町

先達三門區

内堀与吉

同区

関
る
の

同区

奉

田	同区	浅	同区	同
中		野		
ま		ふ		い
つ		志		わ
四十七歳		四十九歳		五十歳

同町同区	芝崎	同区	田中	同区	吉野	同町井沢区	小田	同	三上	大正八年	四月吉日
す	ゑ		ま		ゐ		な		く		
四十九歳			四十八歳		五十二歳		四十九歳		四十七歳		

同行者の年齢をみる前に㊦の先達の人数について述べておく。「一覧表」では㊦の先達を男性三人、女性一人としたが、先達の肩書は斎藤要蔵に付いているだけである。しかし日在の住民を二つに分けて書いていることから、小守浦蔵・木嶋松治郎・小守たつを含めた四名を先達と判断したことを断つておく。

年齢をみると①・⑧共に最高齢者は先達で、①の斎藤要蔵は六二歳、⑧の内堀与吉は六三歳である。①の場合先達と見做した男子二人は五一

歳、女子は五七歳である。他の同行者の年齢は⑪⑫共に五〇歳代から四〇歳代で、三〇代以下は一人もない。

⑩明治四五年六月二二日の絵馬には同行者の年齢は記されていないものの、同行者の家族との関係が記されている。

⑩の墨書

夷隅郡東海村

南先達	松崎倉吉
日同	同
同	幸之助
渡辺松太	母
渡辺万	母
渡辺喜三郎	母
押渡部武	母
森甚太郎	母
岩瀬助八	妻
渡辺金藏	妻
森田	妻
渡辺新太郎	妻
斎藤	母
渡辺市太郎	妻
渡辺市太郎	妻
渡辺源之丞	妻
渡辺久藏	妻
樋口栄吉	妻
押田政	妻
小浜	妻

同 稲葉六次郎 妻

小倉文七 妻

藤平秋藏 妻

岩瀬源兵衛 妻

行 吉治郎 妻

水野政三郎 妻

中村市次 妻

露崎幸之助 妻

中村平助 妻

大曾根初太郎 妻

露崎重雄 妻

小守重雄 妻

斎藤清吉 妻

明治四拾五年六月二十二日

明治四五年六月の善光寺参詣は、人数が確定している絵馬の中では最も同行者数の多いものである。同行女性のすべてがその家の当主の母か妻であり、未婚女性は一人も含まれていない。ここに記された家族関係から同行女性の年齢を推測することは難しいが、⑪⑫からみて明治四五年六月の同行女性も四〇代以上であつたろう。善光寺参詣の形態は地域によって異なるであろうが、夷隅郡の現大原町・岬町を中心とした地域では四〇代以降が主となって参詣を行っていたのであろう。

善光寺参詣参加資格に年齢制限があつたとしても、何十歳以上と規定するものではなく、結果として年齢を制限するような規定というか慣習のようなものがあつたのだらう。千葉市牝橋の事例であるが、牝橋地区の古くからの住民の間では現在も男性は出羽三山登山、女性は善光寺参詣を行っている。それぞれの講に入ることのできる資格というより暗黙

の了解は、夫婦が子供を産むことはないであろう年齢、状態に至った時という。講に入ると男性は出羽三山、女性には仲間と善光寺参詣を行うが、現在では善光寺信仰というより定期的な女性の集りになっており、伊豆方面をはじめとする観光旅行に出かけている。出羽三山・善光寺参詣を果した後に子供が生まれると大変バツが悪いということである。

⑩の絵馬の同行者をみると、渡辺市太郎の家からは二人の女性が参加している。一人は市太郎の妻「たか」と「もる」である。もるについては市太郎との関係が記載されていないが、市太郎の母とみてよいだろう。母と嫁と一緒に参加したわけである。小浜の山口七兵衛の場合は妻「いま」と共に参加している。「小浜 山口七兵衛」の記載が「いま」の肩書でないことは確かであり、絵馬の画面にも四名の男性が描かれている。なお明治四五年段階では小浜・大原町と東海村は合併していないため、夫婦は別の村の善光寺参詣に参加したことになる。

② 絵馬の画面を中心に

これまで絵馬に記された墨書を中心としてみてきたが、次に画面つまり絵の部分を中心に善光寺参詣をみてみよう。

絵馬の画面は画工により構成というか様式が異なるようである。画工については「絵馬一覽」に記載したように晴雪・弓削□醉・晴伯・芳蔵の号・名前を絵馬から読みとることができる。この外先にも少し述べたが、人物像を主とした歴史・伝説上の故事等を描いた画工の存在が認められるが号等は不明である。

画工のうち善光寺参詣絵馬を最も多く手懸けているのが晴雪と弓削氏であるが、晴雪については若干ではあるが『大原町史』に触れられている。^⑧『大原町史』には晴雪の外に晴嶺という絵師も紹介されている。両者共に大原町仲町の藤江家の先祖で、晴嶺の本名は藤江藤右衛門で彼は私塾を経営しており、その名を近郷に知られていた。余技として絵画を描き総泉堂と号したという。明治一七年六月二日に歿している。

晴雪は本名藤江勇太郎で昭和四年五月三一日に七〇歳で歿しているが、晴嶺と晴雪がどのような関係であったかは不明である。晴嶺は晴嶺伯脩とも号しているが、「善光寺参詣絵馬一覽」の⑬の画工晴伯は晴嶺のことかとも考えられる。⑬が晴嶺の作であれば明治一七年以前の絵馬ということになる。なお『大原町史』によれば清水寺の武者絵三枚は雪江等学の作で、晴嶺の先代ではないかともいわれている。

弓削氏については不明だが、岬町中原の玉崎神社神官を代々務める家が弓削氏というから、この地域に弓削氏が存在していたことが判る。玉崎神社の弓削家からは久留米藩有馬氏の儒官となった弓削鳴岳が出ている。

⑬の絵馬の画工芳蔵は「染色中社芳蔵図」と自署しているから、染色を業としていたのだろう。藍染職人というより万祝を染めるような職人であったかもしれない。

善光寺参詣絵馬は画工が不明のものもあるが、その絵柄は晴雪系と弓削系に大別することができる。晴雪系は(一)善光寺内陣(内陣という表現は適切ではないかもしれないが、便宜的に使用する。)で参拝する一行を描いたもの。(二)右側に日光東照宮とその周辺、左側に善光寺内陣で参拝する一行を描いたもの。(三)右上に日光東照宮とその周辺、右下に横浜港、左側に善光寺内陣で参拝する一行を描いたもの。以上の三つのパターンに分類できる。いずれも画面に描かれている参拝者の人数と墨書されている人数は同じ、または同じと判断される。

弓削氏の系統に属するとみられるものは、(一)善光寺の外観を描いたもの。(二)右側に日光東照宮、左側に善光寺外観を描いたものの二つのパターンがある。善光寺参道等に参拝者が描かれている。弓削系の絵馬は晴雪系に較べると痛みが進んでいるため、画面の細部を読み取るのは困難である。

晴雪系も弓削系も内陣か外陣かは別として、善光寺または善光寺と日

光を描くのが基本的なパターンであった。全二六枚の善光寺参詣絵馬のうち、善光寺と日光を描いたものが一四枚、善光寺のみを描いたものが一〇枚、善光寺・日光・横浜を描いたものが二枚である。

これによれば善光寺参詣者の多くが日光に回っていたことが判るが、絵馬に日光が描かれていなくとも日光へは回っていたらしく、②〇の大正一二年五月の絵馬には「日光・善光寺同行中」と墨書されている。近世から近代にかけての社寺参詣の旅は只管目的地へ向い、そのまま帰村するというものではなく、目的地へ行く間の有名社寺・旧跡を見て回り、帰路は往路とは別の道を取り帰村するというように周遊コース化しているのが一般的であった。

近世から近代は多くの人々が旅に出るようになった時代ではあるが、当然それを「現代」と同一視することはできない。ようやく善光寺参詣に行けるようになったのであるから、この機会に見ることが出来る所は一ヶ所でも多く見ておこうというのが近世・近代の旅である。文化頃の旅日記と思われる「上方・金毘羅参詣覚書」^②の冒頭にある道中心得之事には

一 銘所旧跡等ハ成丈不残様見物可致成候事、

と記されており、近世の社寺参詣・物見遊山の旅の特長をよく示している。

日本においては一ヶ所に長期滞在し、ゆっくりとその土地を見て回る旅は定着しなかった。とにかく有名社寺旧跡を少しでも多く見ることができればよいのであり、こうした旅は現在にも引き継がれている。

明治四五年二月二七日⑨と大正六年六月一九日⑩の絵馬によれば一行は横浜に立ち寄っている。両絵馬共に棧橋に立つ一行と蒸汽船が誇らしげに描かれている。横浜は往路に寄ったのか帰路なのかは不明であるが、例えば往路に陸路、帰路に海路をとれば同じ所を通らずに帰村できるわけである。横浜ルートをほとんどの善光寺参詣者がとっていたとは考え

にくい(船を利用して東京に出た方が多いのではないか)これもまた周遊コースである。

何度も言うように絵馬には同行の人々が描かれているが、その着物を見てみると④の明治一六年五月一七日の絵馬に描かれた同行中の着物は区々で、先達の男性の一人は茶、一人は藍系の羽織、女性は藍系とみられる着物を着たものが六人、茶系とみられるものが六人、黒系が二人である。ところがそのほかの絵馬で着物の判別がつくものをみるとすべて同一の着物、揃いの着物である。しかも⑨明治四五年の絵馬は、善光寺内陣で参拝する一行も、横浜の棧橋に立つ一行も全員黒羽織を身につけている。女性が羽織を身につけているのはこの絵馬だけである。画工が人物を描くにあたって着物を画一化してしまったともみられるが、態々羽織まで着せることはないだろう。少くとも善光寺参詣の幾組かは揃いの着物を用意したとみてよいのではないだろうか。なお帯も揃いではないかと思うが、画面からは判別し難い。

絵馬の奉納さらにそのの着物まで用意するとなれば旅の費用は膨んでしまうが、すべての善光寺参詣者が絵馬を奉納し揃いの着物を作ったわけではないだろうから、実際には夷隅郡を中心とした地域においてはかなり多くの女性が善光寺参詣に出かけたとみてよいだろう。またここで取り上げた絵馬は明治・大正のものであるが、絵馬の奉納はなかったものの、女性の善光寺参詣は近世まで遡ることができると断定してよいだろう。

おわりに

本稿では納経帳と絵馬を素材として女性の旅について述べてみた。現段階では旅日記以外の史料の収集が必要であり、女性の旅を論じるまでには至らないがその一端は明かにすることができたと思う。

近世Ⅱ女性の旅などにはほとんど出ることではできなかった、という図式は改められてきたが、女性の場合旅に出ることができる階層は男性より狭められていたではあろう。旅に出た女性の年齢は絵馬に記されただけのものから判断すると四〇代以上である。地域によっては若い女性が善光寺参詣等を行う事例もあると聞いたことはあるが、それは通過儀礼的なものとして地域に定着していたものであり、本稿で取り上げたような善光寺参詣は家における女性の地位や生理的なことを考慮すると、四〇代以上の女性が旅に出ることが一般的であったろう。女性の旅といっても女性のみで旅に出ることは少く、男性が善光寺参詣のように先達という立場で随行したり、男性の旅に女性がついていくというのがほとんどだろう。

ここで若干旅に関連して房総の地域性について述べておこう。房総においては長期の旅が盛に行われていたが、その背景には房総の生産性の高さがあった。周囲を海と河川に囲まれ温暖な地域であったため、水産物・農産物・林産物が豊富でありかつ大量の物資を消費してくれる江戸も控えていた。こうした経済的基盤をもとに伊勢参宮・出羽三山登山・富士登山等々が盛んに行われたが、出羽三山登山は地域によっては通過儀礼的な意味を持つことが多かった。

盛に行われた男性の旅により女性の旅をも容易にしたとみることができ、その代表として位置付けられるようになったのが善光寺参詣である。房総における旅の盛行は経済的な面からだけでは語れない。それを示すのが出羽三山登山と富士登山、特に出羽三山登山である。房総を除く関東とその周辺における出羽三山信仰についてはほとんど知識はないが、房総における三山信仰は現存する遺物からみて関東地方では抽んでおり、今もなお三山登山を盛に行っている地域もある。このことはここで結論がでることでもないので指摘するに留めておく。

なお房総においても日蓮宗の盛な地域においてはこれまで述べてきた

ような社寺参詣はほとんど行われていない。夷隅郡に属する勝浦市では日蓮宗が盛んであるため伊勢参宮をはじめ善光寺参詣も行われず、身延山や日蓮の旧跡を巡る旅が今でも行われている。

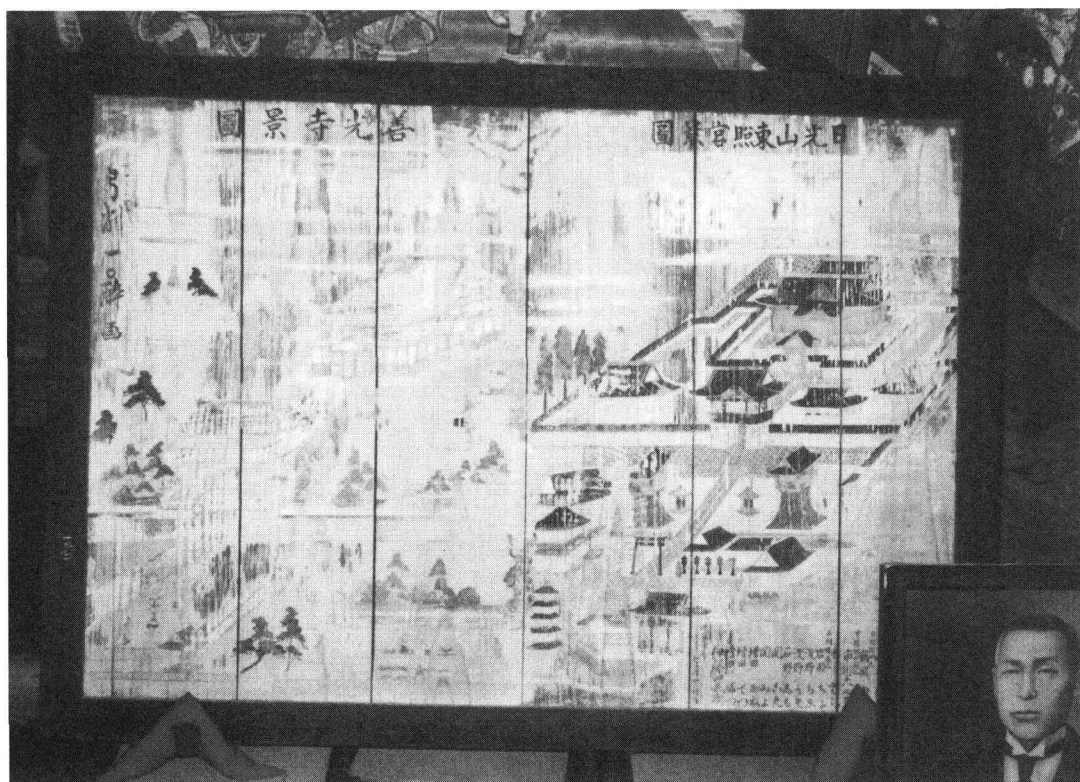
本稿は女性の旅と題したものの、史料収集が進まないため甚だ散漫な内容になってしまった。善光寺参詣絵馬の画面分析も不十分だが、分析をはじめると女性の旅から一層遠離るため、旅関係絵馬を一括して別に発表したい。

註

- (1) 新城常三著『社寺参詣の社会経済史的研究』(昭39) 塙書房 本書は増補改訂され昭和五七年に『稿新 社寺参詣の社会経済史的研究』として塙書房より出版された。
- (2) 深井甚三著『近世女性旅と街道交通』(平7) 桂書房
- (3) 柴桂子著『近世女性の旅日記から―旅をする女性たちの姿を追って―』(『交通史研究』27所収)
- (4) 寂本原著 村上護訳『四国偏礼霊場記』(教育社新書) (昭62) 教育社
- (5) 新城常三著『稿新 社寺参詣の社会経済史的研究』 桜井徳太郎著『講集団成立過程の研究』(昭37) 吉川弘文館 加藤道雄編『日旅六十年史』(昭45) 日本旅行刊によれば日本旅行の前身(社名不明)は明治四一年善光寺参詣団体旅行を企画実施している。
- (6) 小林計一郎著『長野市史考』(昭44) 吉川弘文館
- (7) 大原町編さん委員会編『大原町史』(平5) によると、本書は地曳網絵馬に関連して清水寺の絵馬についても触れている。その中で武者絵馬のうち二点は安政元年と弘化三年奉納のものという。善光寺参詣絵馬の年代についても記されているが、誤謬もあるようなので本稿では基本的には筆者が確認した年代等によった。
- (8) 注(7)に同じ
- (9) 川崎吉男編著『伊勢参宮日記考』上(昭62) 筑波書林所収

(国立歴史民俗博物館歴史研究部)

(二〇〇三年三月一三日受理、二〇〇三年五月九日審査終了)



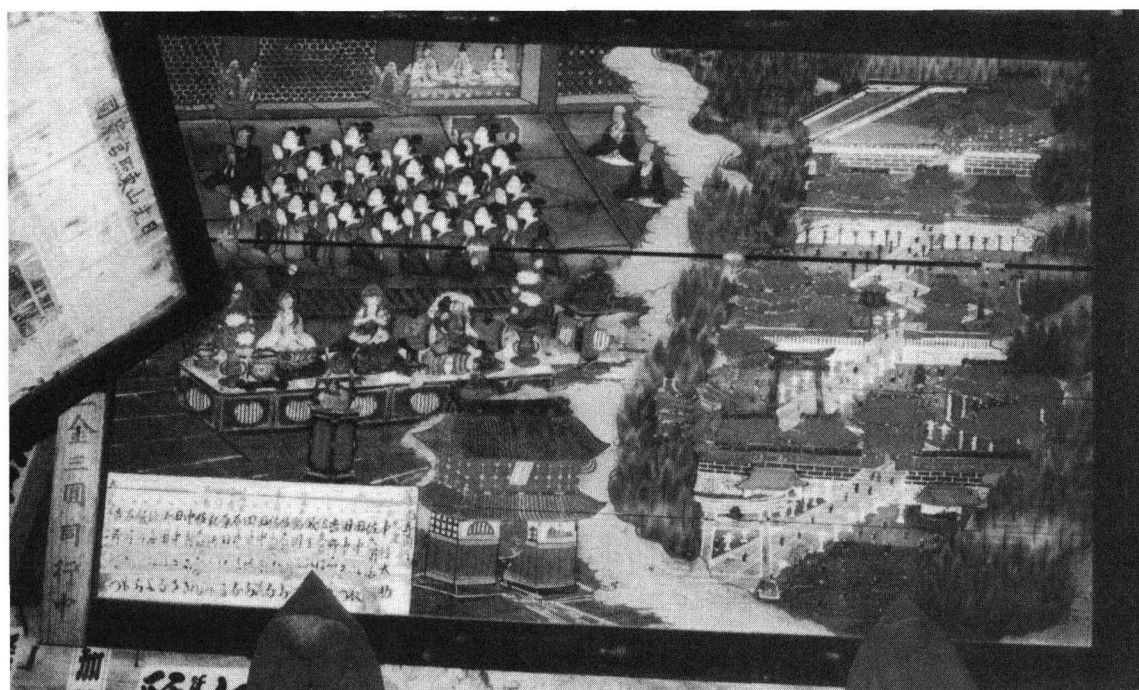
明治20～30年代 No.⑧の絵馬



明治45年 2月27日 No.⑨の絵馬



明治45年 6月22日 No.⑩の絵馬



大正2年 3月11日 No.⑭の絵馬

Travel by Women in Early Modern and Modern Japan

YAMAMOTO, Mitsumasa

Research on early modern travel can be divided into two main kinds. One seeks to clarify the actual forms of behavior, experience, and transportation related to travel, while the other attempts to clarify popular religious beliefs by focusing on temple and shrine pilgrimage as such.

For reasons of research materials, both approaches have tended to focus on men. With heightened interest in research on women's history, however, the body of research on travel by women has now started to grow. While travel research typically relies on travel diaries as its principal source of materials, travel diaries by women are written only by women of considerable education, hence class, making it difficult to observe the actual forms of travel by commoner women.

Clearly the effort to grasp travel by women as a whole makes the discovery of materials other than travel diaries a pressing concern. Some research has made use of registries from temple inns (*shukubo*) and statuary such as devotional pagodas (*kuyoto*). This study relies on a votive scripture ledger (*nokyochō*) and votive tablets (*ema*) to reveal a facet of travel by women. The ledger was offered to Mankoin Temple in Ichihara City, Chiba Prefecture, by the Motegi family (Katsuma, Ichihara City) and records the journey made by the family's ancestor "Tora" who visited the Kannon spiritual sites in Shikoku, Bando, and Chichibu and made the eighty-eight site Shikoku pilgrimage. The ledger only enables us to trace the footsteps of Tora, but the fact that a single woman could make such a journey deserves attention. The twenty-six votive tablets dating from the Meiji and Taisho periods, on the other hand, were offered to Kiyomizudera Temple in Misaki, Chiba Prefecture by women who had made a pilgrimage to Zenkoji in Shinshu. From the images and inscriptions on the tablets, we know the course they traveled, details of their pilgrimage, and their names and regions of origin. Although the tablets date from the modern period, it is believed that women in the early modern period conducted similar journeys.

Votive ledgers and tablets do not provide the quantity of information available from travel diaries. Nonetheless, with the accumulation of information contained in such materials it should be possible to clarify further the nature of travel by women in early modern Japan.
